

影ゆえに在る白と、白がうむ影の間で、
記憶の奥にしまい込んだ白い欠片をたどる。

少年の頃、家の裏の浜で見つけた白い石は宝物で、光と影が交わる防風林は秘密基地だった。木々の間から陽の光が差し込むと、影ははつきりとした形を成し、白は無数の色に変わった。

白い石を手にしたあの日、僕は、光と影の境界線上に立っていることに気づいた。影は白い光によって形作られるが、白は影によってその存在が際立つ。それは僕にとって、光と影、善と悪、静と動のような、世界の仕組みそのものだった。その石は僕のポケットに入れられ、やがて都会の生活の中で忘れられていった。

大人になったある日、美しい形の白い器を目にした。滑らかな曲線と光を受けて輝く表面。ギャラリーの隅に静かに置かれたその器は、まるで生きているかのように、そこに座っていた。

子供の頃に秘密基地で感じた、海の香りと、光と影の美しい世界が、この白い器によって思い出された。

僕はもう、かつての境界線の上にはいなかった。

そして、影と白の間に存在する曖昧な階調を受け入れ、
それがこの世界に充滿しているということを心の底から感じ取った。

僕の心には再び、秘密基地で白い石を拾う少年の高揚感が戻ってきた。

今、浜を見れば白い石、黒い石、影、そして僕もただ一つの世界。

僕は白く、美しい影をたたえる器に未来を描いていく。